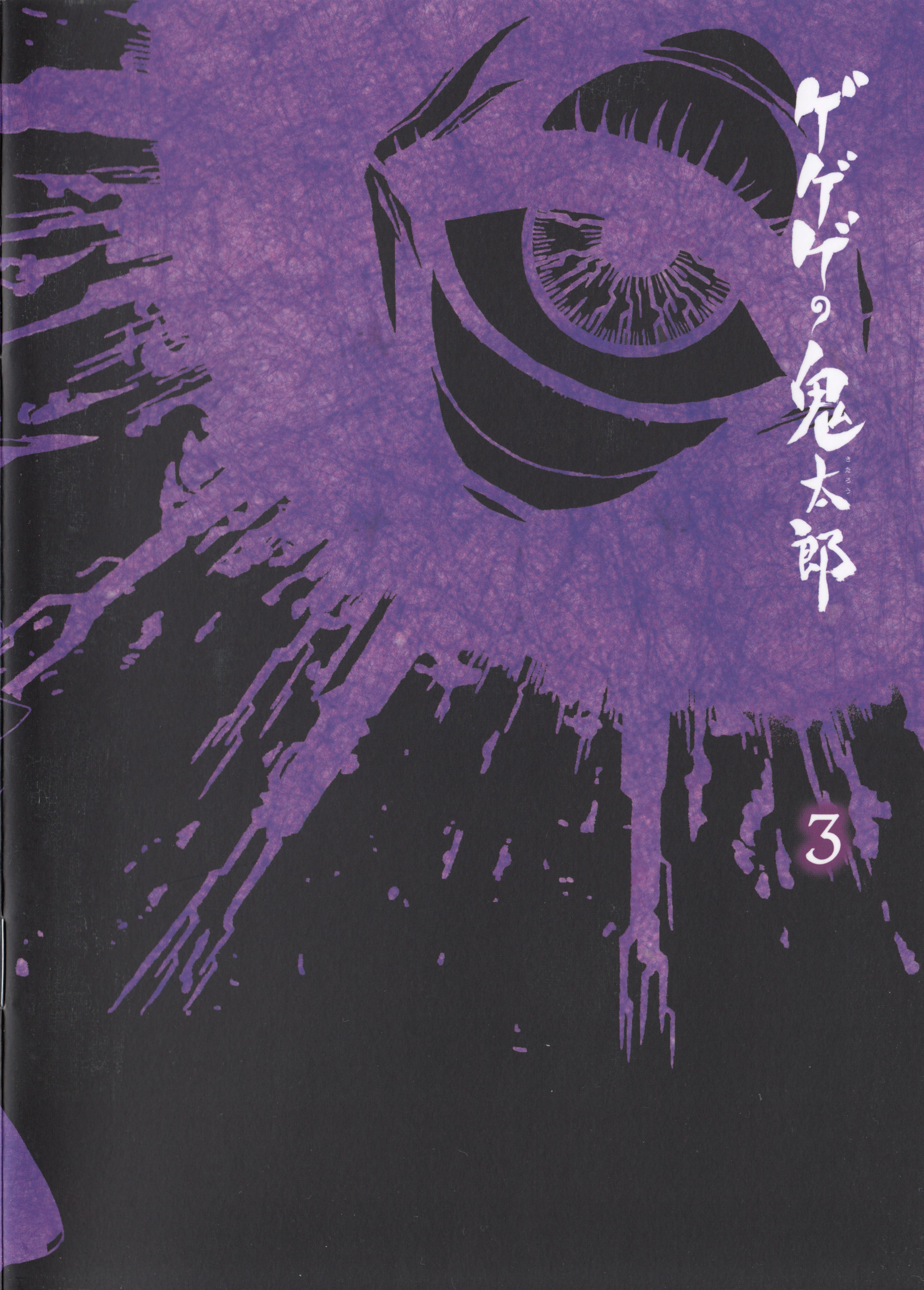

ゲゲゲの鬼太郎（きたろう）
3

DISC





第 27 話

襲来！ バックベアード軍団

ある日、ゲゲゲの森に難民妖怪達がやってきた。突如、彼らが持ち込んだ宝石が光り、魔法使いの少女･アニエスが姿を現す。さらに、その少女を追う謎の男が現われる。男は難民妖怪達の国を滅ぼした西洋妖怪の幹部だった！

演出：岩井隆央　絵コンテ：なかの★陽　脚本：金月龍之介
作画監督：大西陽一　美術：今野慎一

第 28 話

妖怪大戦争





『指輪を破壊するのを手伝って。』と魔女のアニエスは詳しく説明もせずに頼むのだが、鬼太郎の指鉄砲でも指輪は砕けない。焦るアニエスは魔法の力で鬼太郎の妖力を限界以上に引き上げる。そして、今度こそ指輪を破壊したかに思えたその時……!?

演出：三塚雅人　脚本：金月龍之介　作画監督：太田晃博　美術：今野慎一





第 29 話

狂気の フランケンシュタイン

指輪発見のためになりふり構わないアニエスと鬼太郎は衝突する。しかし、偶然居合わせたまなはアニエスに興味を持ち自分の家へと招待する。一時の安らぎを感じるアニエスだったが、西洋妖怪のヴィクターも指輪探しのために日本へやってきていて……!?

演出：牧野次郎　絵コンテ：佐々木憲世　脚本：野村祐一
作画監督：藤原未来夫　美術：今野慎一

第 30 話

吸血鬼のハロウィンパーティー





ハロウィンのイベントで映画館を訪れるまなとねこ娘。しかし、このイベントは西洋妖怪の幹部、カミーラが仕組んだものだった。二人が異変に気づいた時には、周りは吸血鬼と化した人間達であふれており、次々と襲い掛かってくるのだった。

演出：角銅博之　脚本：金月龍之介　作画監督：市川吉幸　美術：今野慎一





第 31 話

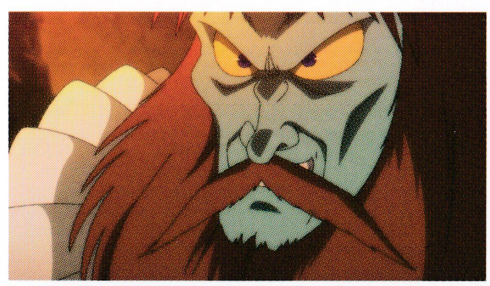
小豆洗い(あずきあらい)
小豆(あずき)はかり小豆婆(あずきばばあ)

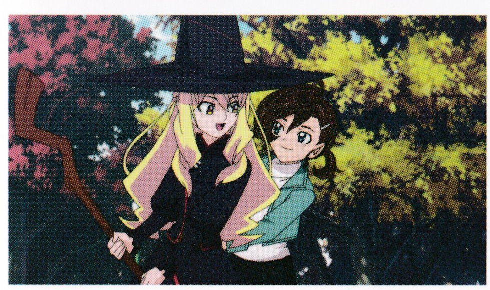
どうにかして洋菓子人気を抑え小豆を復権したいと悩む小豆洗い、小豆はかり、小豆婆のところにねずみ男が通りかかる。金儲けを思いついたねずみ男は、動画配信で人気者となって小豆の広告塔になれとそそのかすが……。

演出：熨斗谷充孝　脚本：井上亜樹子　作画監督：小林ゆかり　美術：今野慎一

第 32 話

悪魔ベリアル
百年の怨嗟(えんさ)





指輪が見つからず嘆くアニエスを元気づけようと、まなは彼女を連れて大好きな境港へ。偶然にも烏天狗の小次郎と再会するまな達。良いところを見せようと張り切る小次郎は風を起こす技を披露するのだが、誤って悪魔ベリアルの封印を解いてしまい……。

演出：内山まな　絵コンテ：八島善孝　脚本：野村祐一
作画監督：八島善孝　美術：今野慎一

DISC





第 33 話

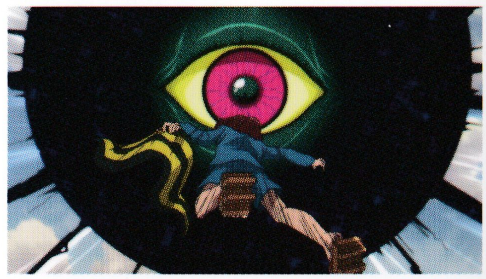
狐の嫁入りと 白山坊（はくさんぼう）

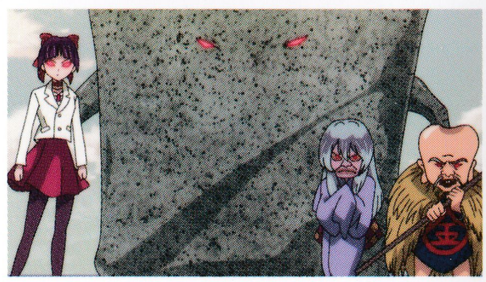
鬼太郎達はとある山奥にある大きな屋敷を訪ねていた。妖怪ポストに寄せられた手紙によると、やよいという娘が妖怪・白山坊に狙われているという。砂かけばばあが、やよいの周りに妖怪を拒絶する結界をはり襲撃に備えるのだが……。

演出：前島健一　脚本：吉野弘幸
作画監督：鈴木伸一、桝井一平　美術：今野慎一

第 34 話

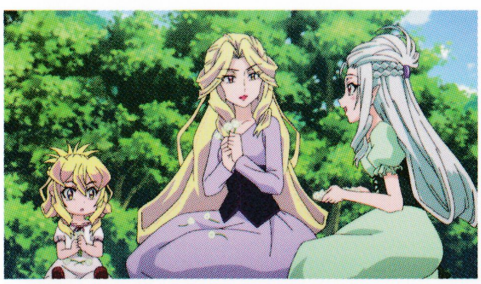
帝王 バックベアード





子泣きじじいが行方不明になってしまった。皆で子泣きじじいを探しに出たものの、さらに砂かけばばあ、ぬりかべ、一反もめん、ねこ娘までが次々と姿を消してしまう。これは西洋妖怪の仕業だと考えた妖怪達は、鬼太郎の家につめかけ……。

演出：飛田 剛　絵コンテ：越智一裕
脚本：金月龍之介　作画監督：小泉 昇　美術：今野慎一





第 35 話

運命の魔女たち

池のほとりで一人思い悩んでいるアニエスのところにまなが現われる。そこは二人で初めてランチをした場所だった。アニエスは少しずつまなに語りだす。自分の母親のことや姉のアデルのこと、ブリガドーン計画のことを。

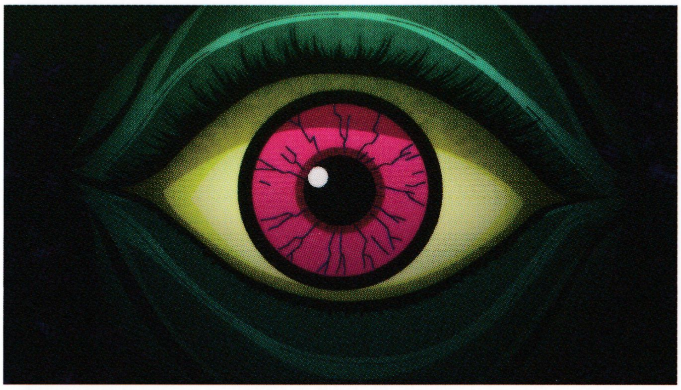
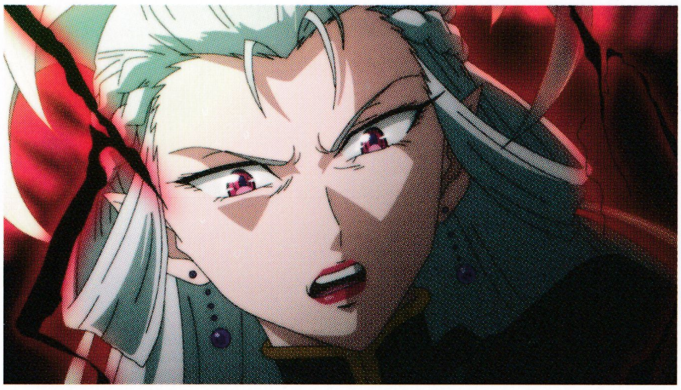
演出：門 由利子　脚本：大野木 寛
作画監督：小松こずえ　美術：今野慎一

第 36 話

日本全妖怪化計画

アルカナの指輪を発見したまなは、指輪を自分の指にはめてしまい抜けなくなってしまった。そこへアデルと鬼太郎が現われる。一人で逃げるまなの前に、西洋妖怪達が次々と襲いかかる。まなを巻き込み指輪争奪戦は激しさを増していくのだった！

演出：やしろ駿　脚本：大野木 寛　作画監督：仲條久美、信実節子　美術：今野慎一

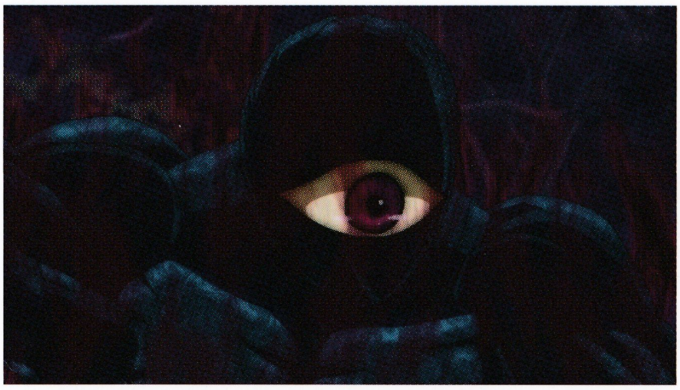



第 37 話

決戦!! バックベアード

奇跡的に生きていたまなは、何としてもブリガドーンを止めるべく天を突く光の柱を目指す。ブリガドーンを発動させてしまったアニエス、満身創痍のアデル、二人の運命は!? 傷つき捕われた鬼太郎は、バックベアードを倒すことができるのか!!?

演出：岩井隆央　絵コンテ：小川孝治　脚本：大野木 寛　作画監督：浅沼昭弘　美術：今野慎一

ゲゲゲのお喋り③



バックベアード役
田中秀幸

×



アニエス役
山村響

今回は西洋妖怪編に登場したバックベアード役の田中秀幸さん、アニエス役の山村響さんに登場していただきます。自らの役をどのように演じたのか、そしてキャラクターの意外な一面も明らかにしていただきました。

今期の『鬼太郎』は大人が観ても面白い

――田中さんは第6期の『ゲゲゲの鬼太郎』では、バックベアードを演じる前に、ほかの役も演じられていますね。

田中秀幸(以下田)：蟹坊主(第17話「蟹坊主と古の謎」)をやらせていただきました。バックベアードのお話を頂いたのは、蟹坊主が終わって少ししてからです。西洋妖怪編に、連続して出演できるとのことで、すごく嬉しかったです。……蟹坊主という役もすごく好きだったんですけどね(笑)。

――山村さんは、アニエス役に決まってのご感想は？

山村響(以下山)：出演が決まりました、というご連絡があったのが2018年の夏ごろでした。事務所のスケジュールに"鬼太郎"と書いてあって(笑)。「ゲストで呼んでいただけるのかな？」と思っていて、届いた資料を見たらキャラクターの詳細に「鬼太郎と共に行動する」と書いてあり、「あっ！これって……レ……レギュラー？」と。「この役に決まりました！」というような知り方ではなかったので、より驚きと喜びがありました。西洋妖怪編の公式リリースがされた直後に自分の役がわかったので、発表されていたキービジュアルを見たときに、「あれ？ このキービジュアルに大きく描かれてるの、私の役だー！」という発見をして(笑)。何と言いますか、武者震いをしたというか、重要な役を頂いたという喜びがじわじわと湧き上がってきた感じでしたね(笑)。



――第6期の『鬼太郎』にはどういった印象をお持ちですか？

田：今までの『鬼太郎』の雰囲気を持ちながら、新しい世界がありますよね。キャスティングも大きく変わっているので、楽しみにしていました。マコさん(野沢雅子さんの愛称)の目玉おやじも面白いし(笑)、登志夫ちゃん(古川登志夫さん)のねずみ男もハマってるし、みゆきちゃん(沢城みゆきさん)が演じている鬼太郎も、今までと違ってクールな感じで、今期の鬼太郎は面白いなと思いました。

――田中さんは、以前の『鬼太郎』にも出演されていますね。

田：そうなんです、今までもたくさん出させていただいています。バケローというキャラも演じましたね(第5期に登場した携帯妖怪、玩具にもなっている)。

――山村さんは、『鬼太郎』シリーズの印象はいかがですか？

山：自分が声優になる、ずっと昔から観ていた作品でしたし……実は小さいころに観ていて、鬼太郎に恋をしていた時期があったんです(笑)。鬼太郎ごっこをしていたんですよ。お母さんに鬼太郎

をやってもらって、私はねこ娘で。鬼太郎の仲間になりたかったんですよね。

田：お父さんは、ねずみ男か何かをやってたの？

山：お父さんが仕事に行っている間にやっていました(笑)。でも、家族で観ていた作品だったので、声優として作品の中に飛び込めることが嬉しかったですね。今期はYouTuberやスマホなど時代に即したものが出てきたり、難民問題などの重いテーマを取り上げたり……。大人が観ると考えさせられるし、子どもが観ると面白い作品になっていると思います。あとは……やっぱり鬼太郎ってかっこいいなって(笑)。アニエスを通して、小さいころの恋心を思い出しました。

運命を背負っているアニエス、とても悪いバックベアード

――アニエスは、難しい役どころではありませんでしたか？

山：そうですね。バックベアード様と対立して物語のカギを握る、重要なポジションです。だから最初はドキドキしていたんですけど、アニエス自身はすごく純粋で素直なんですよね。必死で周りが見えなくなることも多いですが、自らの運命に抗うために、信念を貫くために行動している子なんです。そういったことを、台本を読んだり、小川監督とお話ししたりして感じたので、そこがブレないようにしっかり演じていきたいと考えました。

――小川監督から言われて、印象に残っていることはありますか？

山：アニエスが初登場のアフレコのときに言われたのは“彼女は頑固で、自分の中でこうしなきゃいけないという想いが強い”ということでした。それに追われている身であるが故に、下手すると殺されてしまう運命を背負っている子だと。そんな緊張感のある子なので、鬼太郎に対して「助けてほしい」という言葉は、彼女の口からは最後の最後まで出ませんと言われました。自分1人でどうにかしなければという葛藤があるから、最後に「助けてほしい」と口にするときまでは強くあってほしい、とも言われたんです。最初は見た目のイメージで、幼い声を作っていたのですが、そういう背景があるので、年齢感を少し上に軌道修正して、



今のアニエスの声になりました。

――アニエスをそんな風に追い込んだバックベアードは、やっぱり悪いやつですよね(笑)。

田：(笑)。そうですよね。すごく悪いやつですよね。

――小川監督から、バックベアードへの要望はありましたか？

田：そんなになかったですね。最初はあまり感情を出さないで、淡々とした喋りにしようかと思っていたんですが、話が進んだら……そこまでするかと思うくらいアニエスを追い詰めたりするので、感情を出さざるをえなくなりました。変態じゃないのかと思うくらい(笑)。

お2人が印象に残ったシーンは？

田：僕は、アニエスが鬼太郎から旅行に誘われて迷ってるシーンが好きなんですよ。義理で誘ったんだろうって1人でいじけるやつ(笑)。あのシーン大好き。

山：本当はすごく行きたいんじゃん！っていう(笑)。

田：そうそう(笑)。あのシーンの、アニエスのかわいらしさが大好きなんですよ。

山：「行きたくない」と言いながら、すごく準備していて(笑)。行ってほしかったですけどね、行けなかった……。

田：かわいいよね、アニエス。

山：嬉しいです(笑)。でも、バックベアード様のせいで行けなかったんですけどね(笑)。

田：そうでした(笑)。

――山村さんは、印象に残ったシーンはございますか？

山：アニエスのシーンで言うと、「自分の運命は自分で決める」と言い放ったシーンが印象的でした。彼女はその言葉を信念に掲げて、がんばっているんだなと感じましたね。あと、鬼太郎との会

話が全然かみ合わないっていうのも印象的でした(笑)。この魔法はどういうことだって鬼太郎が聞いても、魔法が反応してどうのこうのって小難しい言葉を並べ立てて(笑)。鬼太郎が、わかるように言ってくれっていう、あのくだりがすごく好きでした。あと、バックベアード様って……すごく、お笑いになりますよね(笑)。笑っているシーンがすごく多いので、アフレコ現場でもみんなで「バックベアードって、笑い上戸ですよね」と話していました(笑)。最初はバックベアード様の笑い声がすごく怖かったんですけど、笑い上戸だと気づいてからは「今日もすごく笑っていらっしゃるなー」と思うようになって(笑)、少し怖さがやわらぎました。あとは……アデルの本当の想いがわかるシーンはグッときました。アニエスは、「姉はこういう人間なんだ」という決めつけがあって、ずっと対立していましたが、アデルさんの中では、そうせざるをえなかった理由があったんですよね。それを知って、アデルさんのことがより好きになりましたし、グッときたシーンでした。そのアフレコのとき、本番で本当に涙が出て、気づいたら終わっていたという感じで……すごく良い時間を過ごさせていただきました。



西洋妖怪達は鬼太郎ファミリーよりも濃い!?

――バックベアードの配下の西洋妖怪3人も面白いキャラクターですね。

田：それぞれ魅力のあるキャラクターですしね。演じてる皆さんも上手ですし。

――山村さんは、バックベアードの部下の西洋妖怪達には、どういう印象を持たれていますか？

山：最初は、ものすごく強くてヤバイやつらがやってきた、という印象でしたけど、話が進むにつれて、どこか憎めないというか……かわいらしいと思えるようになりました。カミーラさんとか、ヴィ



クター・フランケンシュタインとか。特にフランケンは、まなちゃんに対する態度とかが、憎めないキャラクターでしたね。ハロウィン回とかも、観ていてぴったりだなと思いました。視覚的にも、より華やかになったんじゃないかなという印象がありました。日本妖怪の中に、西洋の風が吹きました！

田：鬼太郎ファミリーは濃いキャラクターばかりですが、西洋妖怪達もそれに負けないくらい、それぞれのキャラが、面白かったよね。

――部下のバックベアード様への心酔ぶりもすごいですよね(笑)。

山：バックベアード様は良い上司なんだろうなと思います(笑)。結構現場を見に来られるし(笑)。失敗をしても、お前ともあろう者が仕方ない、みたいな感じで助けてくれて、意外と優しいなって。

田：そうか、結構優しかったか。

山：そうなんですよ、結構優しいなって。セリフが優しいし、いつも見守ってくれていて。

田：確かに、よく部下を見てますよね。

山：まさに、大きい目でよく見てくれてる。実は、良い上司かもしれないですね(笑)。でも、そうやって、バックベアード様が西洋妖怪編の根底に構えているからこそ、ずっと緊張感の絶えないシリーズになったのかなと思いますね。

――では、鬼太郎ファミリーのみなさんとアフレコしてみての感想をお聞かせください。

田：アフレコ現場が、とっても良い雰囲気なんですよね。ある程度の緊張感があり、でも和気あいあいとしている、良い雰囲気です。

山：マコさんに初めてお会いするので、すごく緊張していたのですが、優しくご挨拶してくださって……アフレコ後に行くランチもご一緒して、緊張が解けました。ご飯を食べながら、今日のアフ

レコのアレはああだったよねとか話したり、今後どうなるのかを小川監督に聞いたり……そういう時間がすごく楽しくて、ファミリー感があるんですよ。

田：プロデューサーの永富さんも、雰囲気を大事にしてくださる方なので、いろいろなイベントを開いてくれたりしましたよね。

山：調布の花火大会に鬼太郎ファミリーが呼ばれまして、その後、「ちょっと、スタッフも一緒に語り合いましょう！」ということで、オフィスでちょっとしたお食事を用意していただいたんです。スタッフさんとお話しする場があまりないので、そんな場をしっかりと作ってくださって、ありがたかったです。

田：永富さんは『ワールドトリガー』でもお世話になったんですよ。あのときもイベントや食事会を企画してくださって、ファミリー感を出そうとしてくださるプロデューサーさんですね。

BOX3を購入してくれたみなさんに！

田：西洋妖怪編、楽しんでいただけましたでしょうか？ 僕もバックベアードとして楽しくやらせていただきました。西洋妖怪は不滅です。また、お会いできる機会があるかもしれません、どうぞよろしくお願いいたします。

山：アニエスとして、鬼太郎と共に行動をして、１つのことを成し遂げられてよかったなと思っています。何度も何度も、鬼太郎、アニエスとバックベアード様の戦いを観ていただきたいですね。何回も観るうちに色々な発見があると思います。アニエスの心の変化も、わかるんじゃないかな？ 最後を知った状態で、また最初から観るのもきっと面白いですよ。アデルの真実を知ってから観直すと「このセリフはこういうことだったんだな」という発見があったりして、より切なくなったりもすると思うので、その辺りを楽しんでいただけたら嬉しいですね。あとは、バックベアード様は「良い上司だな」とか(笑)。そう考えながら観ると怖さも減るので(笑)。

田：今日の取材で、良い上司だと発覚してよかった(笑)。

山：(笑)。どうか、永く愛していただけると嬉しいです。アニエスを演じられてすごく幸せでした。





田中秀幸

東京都出身。青二プロダクション所属。代表作はアニメ『ドカベン』山田太郎役、『キン肉マン』テリーマン役、『ONE PIECE』ドンキホーテ・ドフラミンゴ役など。テレビ『王様のブランチ』ナレーションなど。映画『007』シリーズ ジェームズ・ボンド役など。



山村響

福岡県出身。俳協所属。代表作はアニメ『Go!プリンセスプリキュア』天ノ川きらら/キュアトゥインクル役、『レイトン ミステリー探偵社 ～カトリーのナゾトキファイル～』ジェラルディン・ロイヤー役、ゲーム「アイドルマスター シャイニーカラーズ」七草はづき役など。

永富×小川の ゲゲゲの部屋

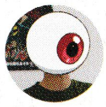


プロデューサーの永富と、シリーズディレクターの小川がスタッフを招いて『ゲゲゲの鬼太郎』第6期を語り合う連載コーナー第3弾！今回のゲストは、劇伴作家の高梨康治さんにご登場いただき、音楽や西洋妖怪編について語っていただきました。



プロデューサー
永富大地

×



シリーズディレクター
小川孝治

×



音楽
高梨康治

小川監督は高梨さんの音楽のファン！

――アニメ『ゲゲゲの鬼太郎』第6期をスタートさせるにあたり、どのような経緯で高梨さんにお願いする運びとなったのでしょうか？

永富大地（以下永）：音楽はどなたにお願いしようかという相談の場がありましたが……小川監督は高梨さんの音楽が大好きなので、高梨さんにお願いすることになるだろうとは思っていました（笑）。でも単に監督の好みだけが理由ではなく、第6期と高梨さんとの相性も真剣に考えましたよ。その上でも高梨さんの音楽は、重さや激しさや暗さを持ち、その中に繊細さまで兼ね備えていて、第6期にピッタリと合うだろうなと感じたんです。

小川孝治（以下小）：キャラクターデザインなどの打ち合わせに比べて、断然早く決まりましたね。

高梨康治（以下高）：ありがとうございまーす！

――小川監督が高梨さんの音楽を好きになったきっかけは何でしょうか？

小：きっかけになったのは『ハートキャッチプリキュア！』で音楽を担当していただいたときです。そのときはまだ面識があったわけではなく、僕はいち演出として、高梨さんの曲を話数に当てはめていくという作業をしていました。その中で、第14話「涙の母の日！家族の笑顔守ります!!」という感動的なお話に高梨さんの曲を入れたら、泣きの曲の効果が相まって、とても良い作品になったんです。

――高梨さんは、プリキュアの楽曲にメタル要素を取り入れたことで話題になりましたね。

小：それらの曲を聴いて、すごくフックのあるメロディーラインを書かれる方だなと思っていたんです。その後、自分の趣味もメタルに傾向していって、さらに高梨さんの曲が好きになりました。



永：小川監督は、高梨さんのライブにも行かれてましたよね？

小：はい、毎回行ってます。

高：ご招待しようかと思って連絡したら、「もうチケット取ってあります！」と言われたんですよ（笑）。前の方でヘッドバンギングしてくださってました。

小：2階の関係者席には絶対行かないです！ やはり、真ん中で良い音を聞かないと。

――依頼が来たとき、高梨



さんはどのようなお気持ちでしたか？

高：「よっしゃ!!」って感じでした（笑）。『鬼太郎』のお仕事をさせていただけるなんてすごいことですから！ しかも小川監督ですから、メタルをやらせてもらえるだろうなと。

小：そのつもりでお願いしました（笑）。

高：それに、個人的にもいわゆる“鬼太郎世代”なうえ、仕事でも実写版映画『ゲゲゲの鬼太郎　千年呪い歌』の音楽を担当していました。ですから、『鬼太郎』についての造詣がどんどん深くなっていますね。

永：『鬼太郎』には、原作や過去のアニメがあって、かつ実写やドラマもありました。第6期では、そのどれにも似ていない新しい『鬼太郎』を作らなければいけなかったんです。ですから、『鬼太郎』の歴史を把握されている高梨さんにメインスタッフをお願いできるのは、ありがたいことでした。

高：まぐれですけど（笑）。

永：いや、僕の計算通りです（笑）。

高梨さんの音楽制作は、妖怪の仕業？

――音楽が高梨さんに決定してからは、どのような流れでお仕事が進むのでしょうか？

永：まずは高梨さんに最初に40曲程の依頼をさせていただいて、打ち合わせです。

高：打ち合わせのとき、僕のバンド「刃-yaiba-」のギタリストである健至（藤澤健至さん）を紹介させていただきました。健至の感性は僕と違って、2000年以降の近代メタルの感覚があるんです。『鬼太郎』は幅広い年齢層の方が観るでしょうから、近代的なサウンドと伝統的なサウンドのレンジをとりたかったんです。

小：健至さんの書く曲は、疾走感がありますよね。

高：そうなんです！

――高梨さんが作曲する時は、どのようにメロディーを考えるのでしょうか？

高：「来たー！」となって、思いつきます（笑）。あまり考えるわけではなく、勝手に曲が流れてきます。妖怪の仕業かな？

永：天才ですね……。

高：僕の場合は、シンプルにやったほうが良い曲ができるんです。実際に、世間で評価を頂いている曲は短時間でできたものが多くて、散々いじくった曲は評価されないんですよ、不思議なことに。練り込んで良いものができることもあるでしょうから、全てがそうだとは限りませんけどね。

『鬼太郎』の曲の作り方とは

――アレンジ曲は、どういった経緯で作られたのでしょうか。

永：オープニングテーマのアレンジは、“新しい鬼太郎”を作る上で必要だと思い、絶対にお願いしようと決めていました。

高：第1期、第2期、第4期前半のエンディングテーマである「カランコロンの歌」は、打ち合わせで頂いた書類に例として書かれていたんです。「やらなくても良いですよ」と言われたのですが、「やれるやれる！ やるべきですよ！」と答えました。

永：2曲もアレンジの音楽をお願いするのは失礼かと思ったんです。

高：全然気にしてませんよ！ 自分が聴いていたあこがれの曲をアレンジできる訳ですから楽しいです！ でも……、いざ改めて原曲を聞いたら、あまりにも短くて（笑）、こんなに短い曲をどうやってピックアップしようかというのは悩みました。

――高梨さんの思い入れが深い曲はありますか？

高：第20話「妖花の記憶」の曲ができたときには

テンションが上がりました。僕は、良い作品には名バラードが必要だと思っているんです。怖い曲というのは、絵との相乗効果で怖くなるものなので、作るのもさほど難しくないんです。でも感動的なシーンでは、ヘボい曲が流れるとせっかくの絵やストーリーが台無しになるので、そこにリンクできるほど心を揺さぶる曲が必要になるんです。

――怖い音楽は難しくないということですが、どういった作り方をされるのでしょうか？

高：人は、美しいものが少しズレると怖さを感じるんです。ゾンビがガバーっと出てくるよりも、綺麗なお姉さんが笑顔で包丁を持っている方が怖いですよね。音楽にもそれを当てはめると、単純に怖い効果音を入れるのではなく、綺麗な旋律に一瞬の不協が交じるときに不気味さが出ますよ。

第6期にピタリとはまった高梨さんの音楽

――永富さんがお気に入りの曲は何でしょうか？

永：やはり、メインテーマをメタルバージョンにアレンジしていただいた曲です。初めて聴いたときに「めっちゃかっこいいの来た！」と震えましたから。

高：世間に怒られないか、ドキドキしながら出した曲ですね。元の鬼太郎のメインテーマはリズムが跳ねている曲なんです。それを、エイトビートにしてしまうこと自体、とんこつスープに日本そばを入れるような邪道なことですから！





永：僕は聴いた瞬間に「僕達が作りたい鬼太郎の方向はこれです！」と、お伝えしたくなりました。

――小川監督が一番お気に入りの曲はなんですか？

小：先程高梨さんがおっしゃっていた、バラードですね。やはり泣きは必須です。第6話「厄運のすねこすり」は、自分が泣かせる要素の集大成を詰め込んで、音楽の入れ方も涙を搾り取る構成にしました。

高：僕も、搾り取られました！

小：バラードの1番盛り上がるメロディーだけを切り取っても泣けないんです。一曲の中にはしっとりしたタメがあってから、だんだんテーマに移行していく流れがあって、それが映像とシンクロすることで初めて泣けるんです。すねこすりの回はシナリオの段階で音楽とのシンクロ感を意識して作りました。

西洋妖怪編の音楽について

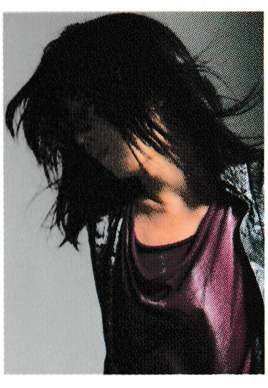
――西洋妖怪編の音楽は、どのような発注をされたのでしょうか？

小：初期の音楽は、和のテイストにこだわっていましたが、西洋妖怪編では西洋風の音色を取り入れていただきました。とはいえ僕は西洋に詳しくないので、高梨さんに丸投げしてしまったのですが……。

高：分かりやすい西洋系を作るのでしたら、教会で流れるようなチャーチオルガンや、ゴスペルを入れると雰囲気が出ます。そうした音色を……メタルに入れます(笑)。そういうところにシフトを切って、西洋妖怪編の作曲も楽しませていただき

ました。
——やはりメタルが基本なんですね。
高：そうです、僕はメタルが基本で、そこから広げていくんです。ジャンルを幅広く網羅しているなんて言いません、多様な音楽性なんて持っていません(笑)。ピンポイントでメタルです。
小：高梨さんの音楽の純度は、年々高まっている気がします。
高：純度は上がってます！　新人の頃は「幅広くなければいけませんよ」と教わりますが、それは60点を並べているだけなんです。それならば自分の武器の精度を上げて、すさまじい破壊力を身に着けたほうが良いと、ある時期から思いました。ですから、僕は狭くて偏った音楽性の作家です(笑)。
——では最後に、BOX3を買ってくれたみなさんにメッセージをお願いします。
小：本編は、音楽の入りや効果音に、すごく気を使って作っています。それでもセリフや別の要素が重なってくるので、純然たるメタルも聞きたいなら……サントラをお買い求めください(笑)。
高：宣伝ありがとうございます！　じゃあ僕からのメッセージは、Blu-ray、DVDが売れないと、僕達、次の仕事がもらえないので……というのは冗談です(笑)！　今回の僕達のお話を頭の片隅に入れて見ていただけると、また違う楽しみ方もできるかなと思っています。
永：3クール目は、起承転結の転に当たる部分なので、話が旋回しています。1～2クールとは違い、1話1話のつながりが深くなっているので、まとめて観て、アニエスの変化などを楽しんでいただきたいです。
高：僕も、ねこ姉さんからアニエスに、だんだん心が移っていきました。あれは、惚れちゃうよ。
永：(笑)。そうですね！　最後まで観終えたときに、みなさんがアニエスのことを少し好きになってくれていたら、3クール目は成功かもしれません。





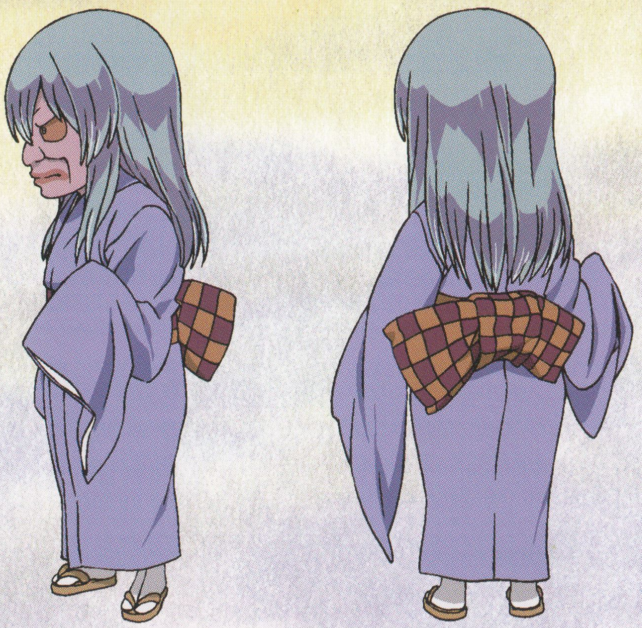
高梨康治

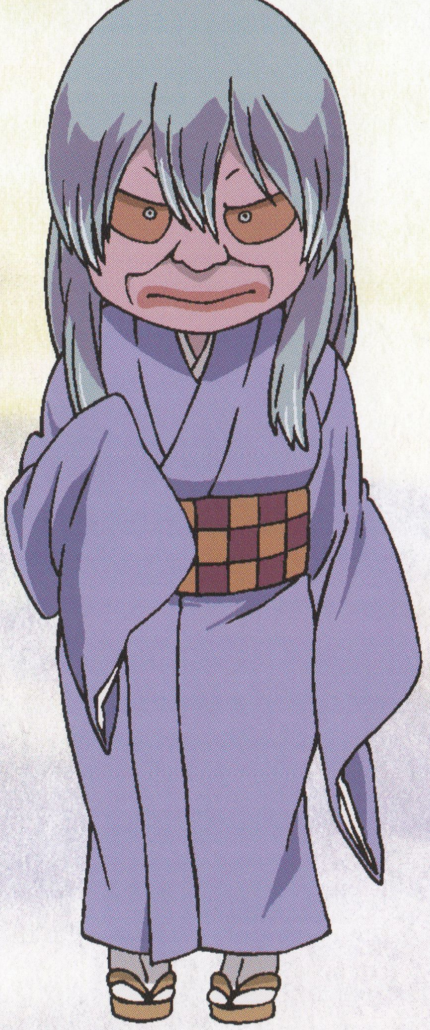
ロックを音楽的原点とし、ハードロックとオーケストラを融合した重厚かつ華麗なサウンドを得意とする音楽家。音楽制作集団「Team-MAX」主宰、和楽器をフィーチャーしたロックグループ「刃-yaiba-」のリーダーでもある。2013年、2014年、2017年『JASRAC国際賞』を受賞。
代表作：TVアニメ『ゾンビランドサガ』『NARUTO -ナルト疾風伝-』『FAIRYTAIL』『プリキュア』シリーズ（フレッシュプリキュア！(2009年)～スマイルプリキュア！(2012年)）『美少女戦士セーラームーンCrystal』、総合格闘技「PRIDE」選手入場テーマ曲他、多数。
「高梨康治＆刃-yaiba-」として、2015年フランス・パリ「Japan Expo」や2018年ロシア・モスクワ「Hinode PowerJapan」等にも出演。

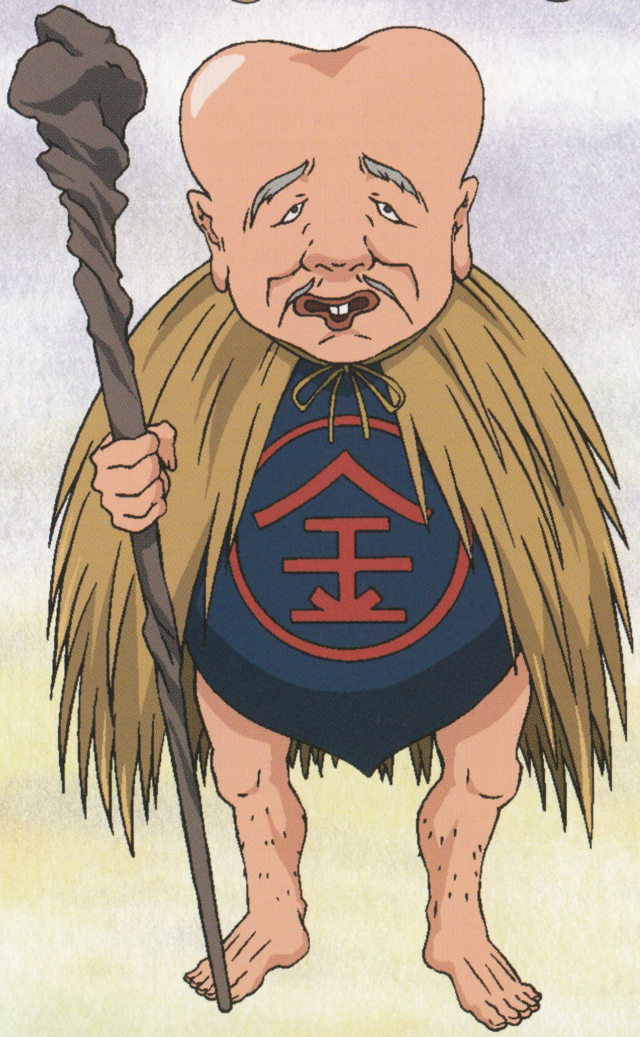
キャラクター紹介

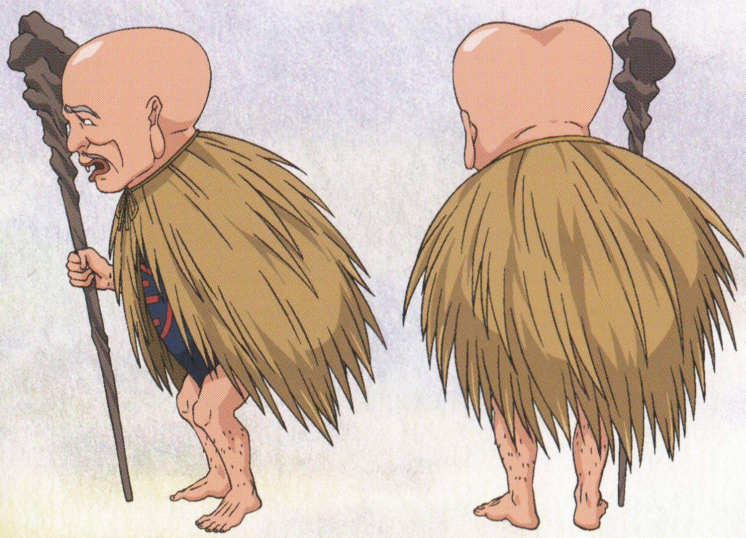
砂かけばばあ

老婆の姿をした妖怪。特殊な妖力を秘めた砂を自在に操る。
敵を攻撃することも味方の体力を回復させることもできる。
妖怪・人間を問わず面倒見が良く、今時のデジタル機器にも強い、鬼太郎達から頼りにされる母親的存在。







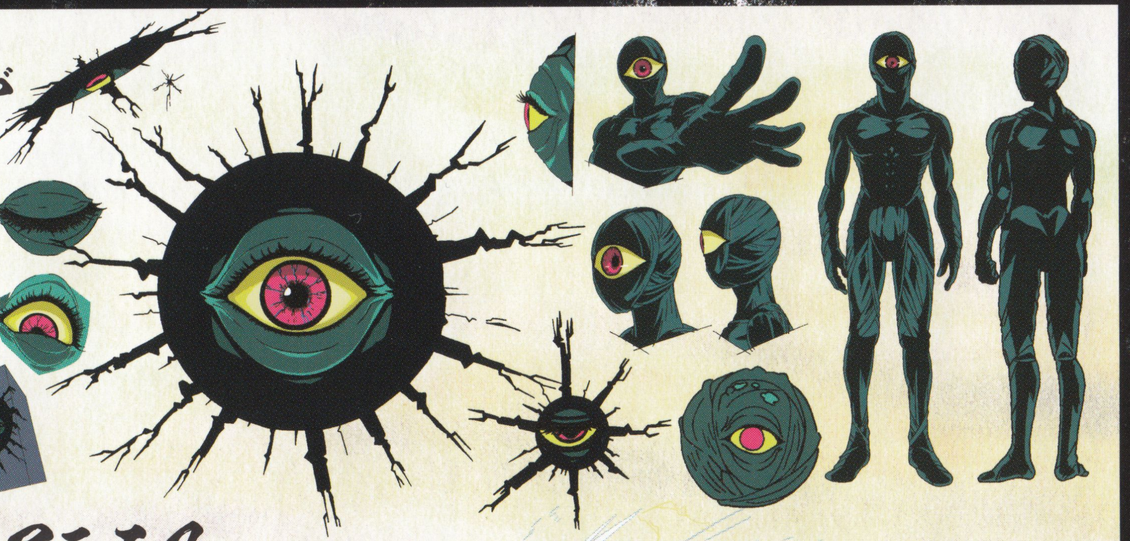


子泣きじじい

老人の姿をした妖怪。赤ん坊の泣き声で敵をおびき寄せ、体を重い石にして敵を押しつぶす。お酒が大好きでいつも酔っ払っては砂かけばばあから叱られている。

バックベアード

圧倒的な妖力を誇る西洋妖怪最強の帝王。世界の全てを支配することを目的とする独裁者でもある。アルカナの指輪を盗み逃亡した魔女のアニエスを追い、部下達と日本へ攻め込んできた。

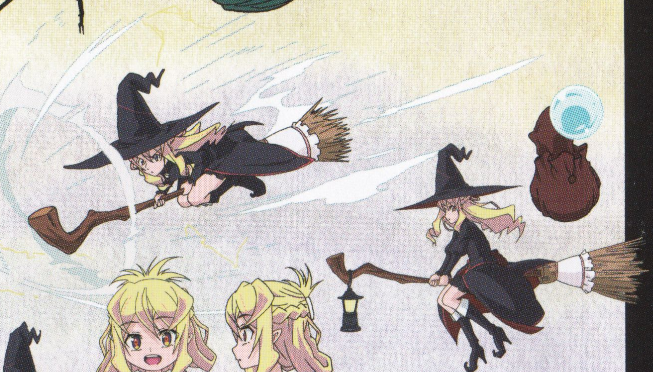




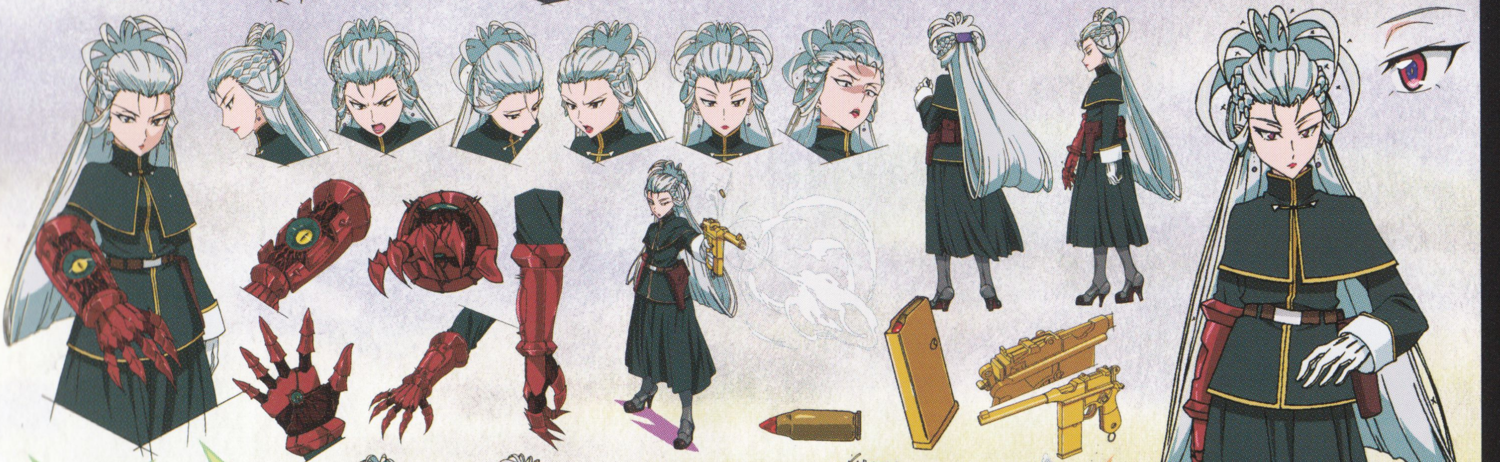
アニエス

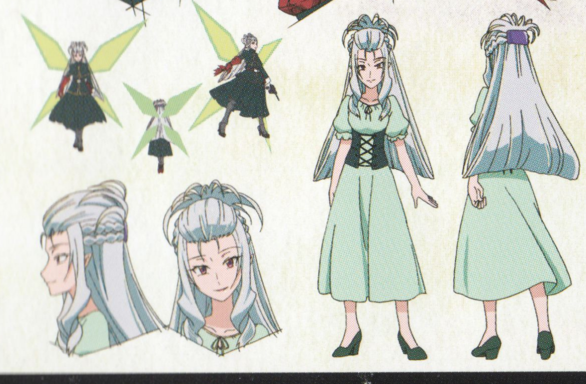
バックベアードの元から日本に逃亡してきた西洋妖怪の魔女。鬼太郎と出会い、行動を共にすることになる。言葉を選ばない自由奔放な性格のため、しばしば鬼太郎らと衝突することも……。バックベアードから盗み出してきたある物を破壊する方法を探している。







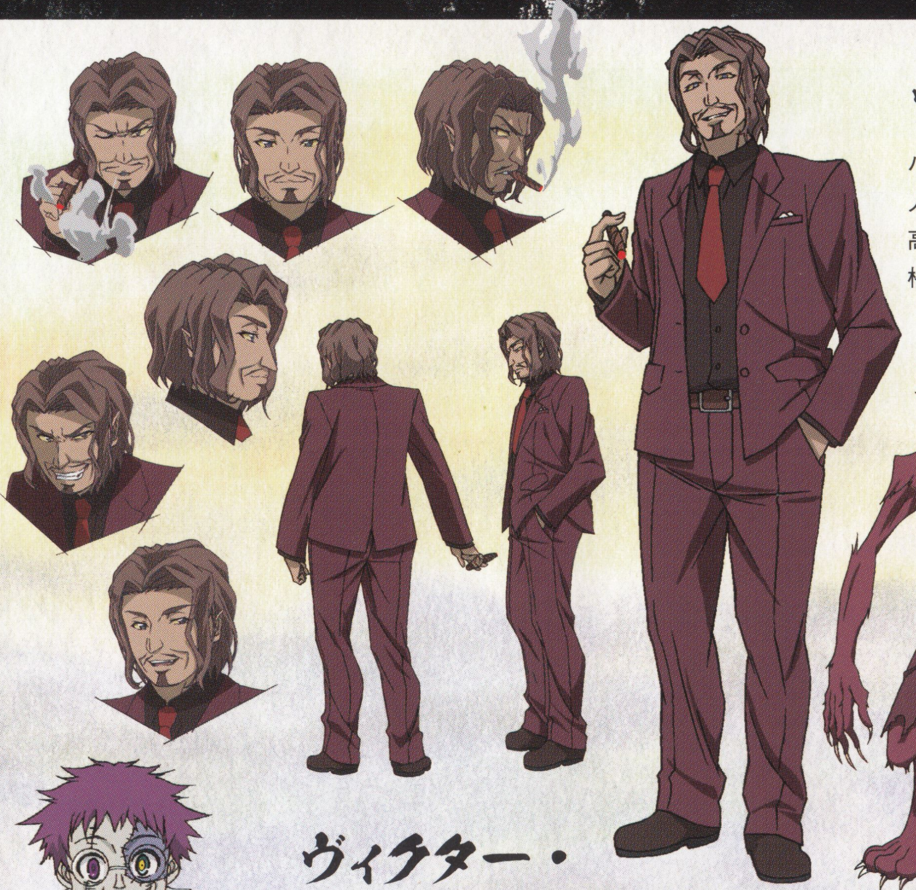




アデル



バックベアード軍団を率いる女将軍。魔女でありアニエスの姉。逃亡したアニエスを追い、西洋妖怪の精鋭を引き連れて日本へやってきた。実直な性格で、代々バックベアードに仕えてきた魔女の名門の家柄を誇りに思っているため、バックベアードに反逆したアニエスに怒りを覚えている。



ヴォルフガング

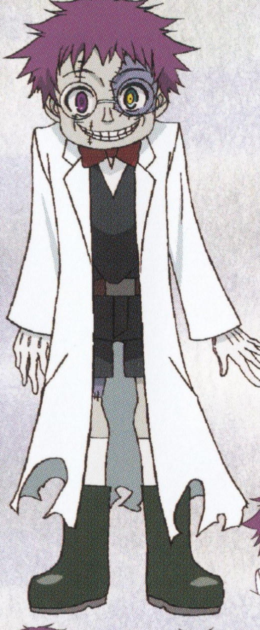
バックベアード軍団の一人。
人間体から狼男へ変身する。
高い身体能力を持ち近接の
格闘が得意な西洋妖怪。

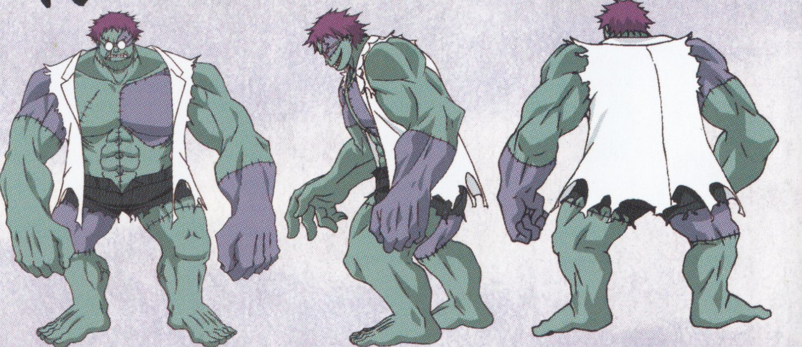




ヴィクター・フランケンシュタイン

バックベアード軍団の一人。
残忍な性格のマッドサイエンティスト。西洋妖怪随一の科学者でもある。普段は少年の姿をしているが、とあるきっかけで巨大な体躯の化物へと変身する。

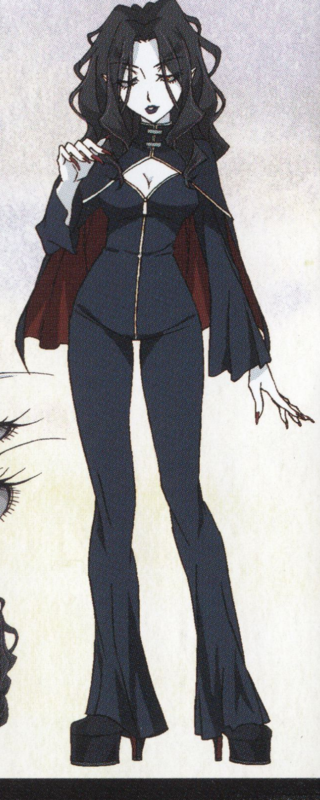


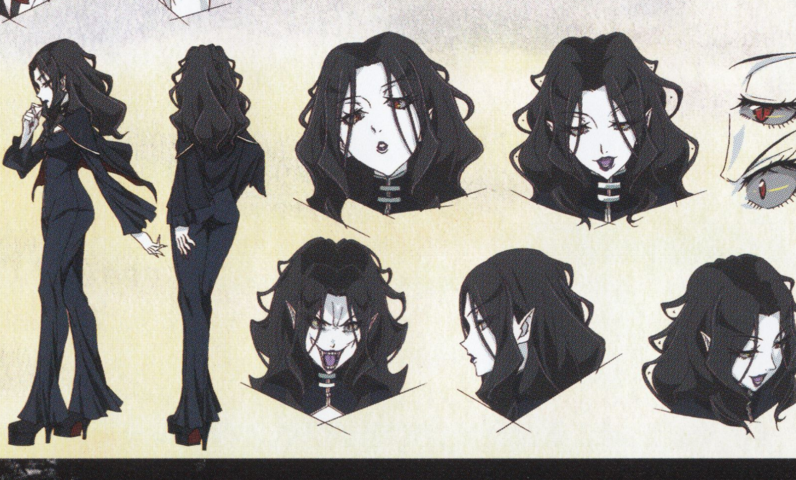




カミーラ

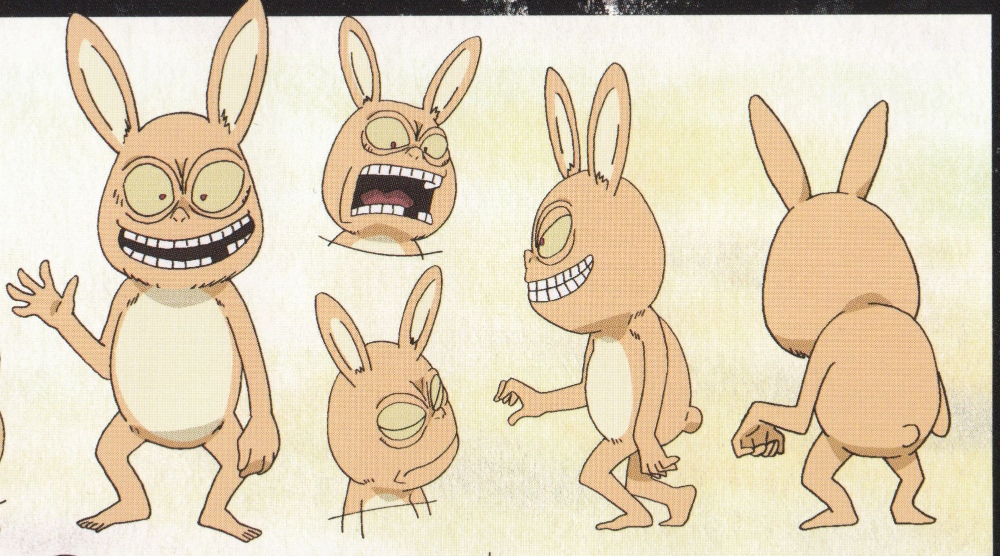
バックベアード軍団の一人。
策略や罠をしかけることに長けている。その妖艶な美貌であらゆる生物を魅了し虜にしてから吸血する。血を吸われた人間は彼女の奴隷と化す。

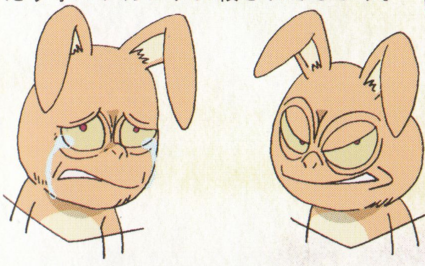




#27 耳長

バックベアード軍団にめちゃくちゃにされた母国から逃げてきた妖怪。ゲゲゲの森に住むことになるが、アニエスを追ってやってきたヴォルフガングに殺されてしまう。

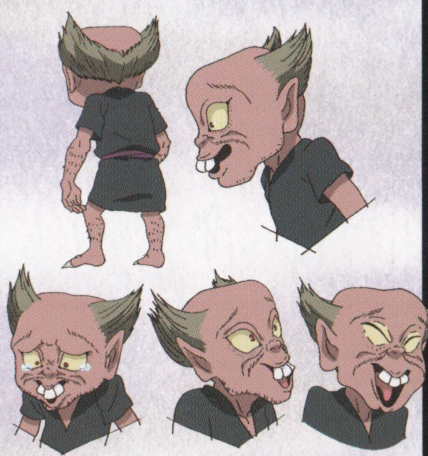






#31 小豆連合

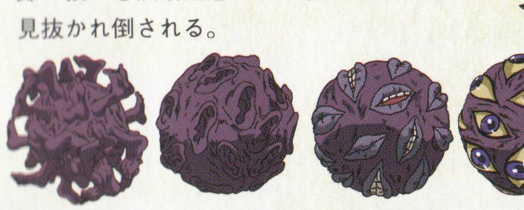
小豆をとぐ音をさせる妖怪・小豆洗い、大きな丸い目と口を持つ妖怪・小豆はかり、小豆を洗う妖怪・小豆婆の3人。小豆をとぐ音で驚く人がいなくなった現代において、小豆の復権に向けて立ち上がる。





#32 悪魔ベリアル

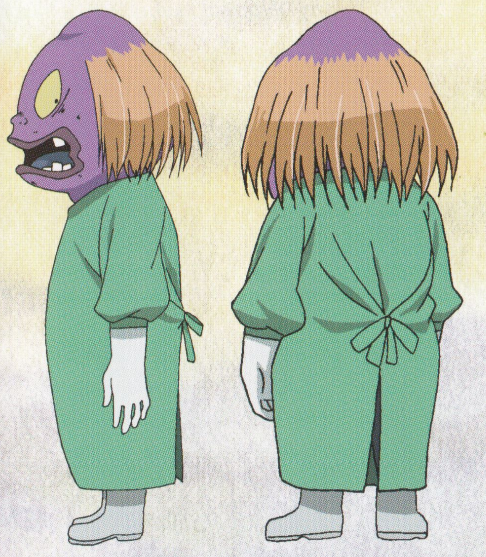
強力な魔力を持つ西洋妖怪。
かつて日本を手に入れようとポルトガルから襲来し、鳥取県・大山の烏天狗の長老により魔力を封じられていたが、150年が経った現在、烏天狗の小次郎が誤って封印を解いてしまう。 魔力を取り戻したベリアルは、烏天狗の里を地中に封じた後、バックベアードの命令を受けて鬼太郎と対峙する。最後は小次郎の技・心眼戒定慧により弱点である心臓を見抜かれ倒される。



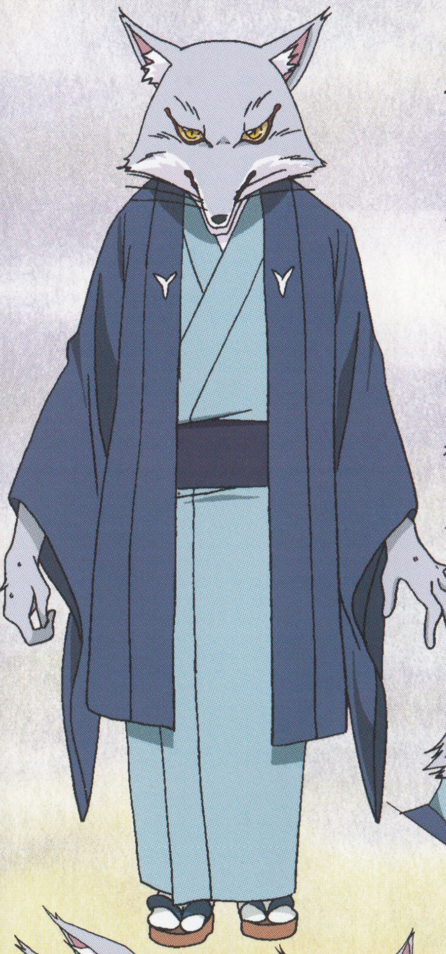
#33 悪魔ブエル

山奥で怪しげな医院を開いている解剖が趣味の西洋妖怪。悪魔形態になると、5本脚で回転しながら攻撃する。

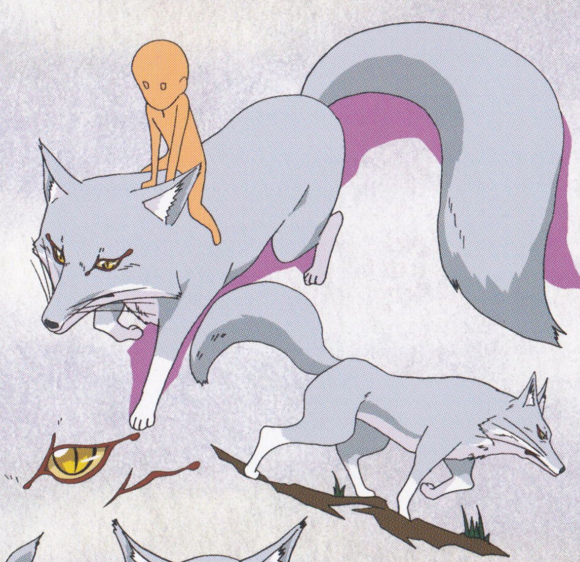


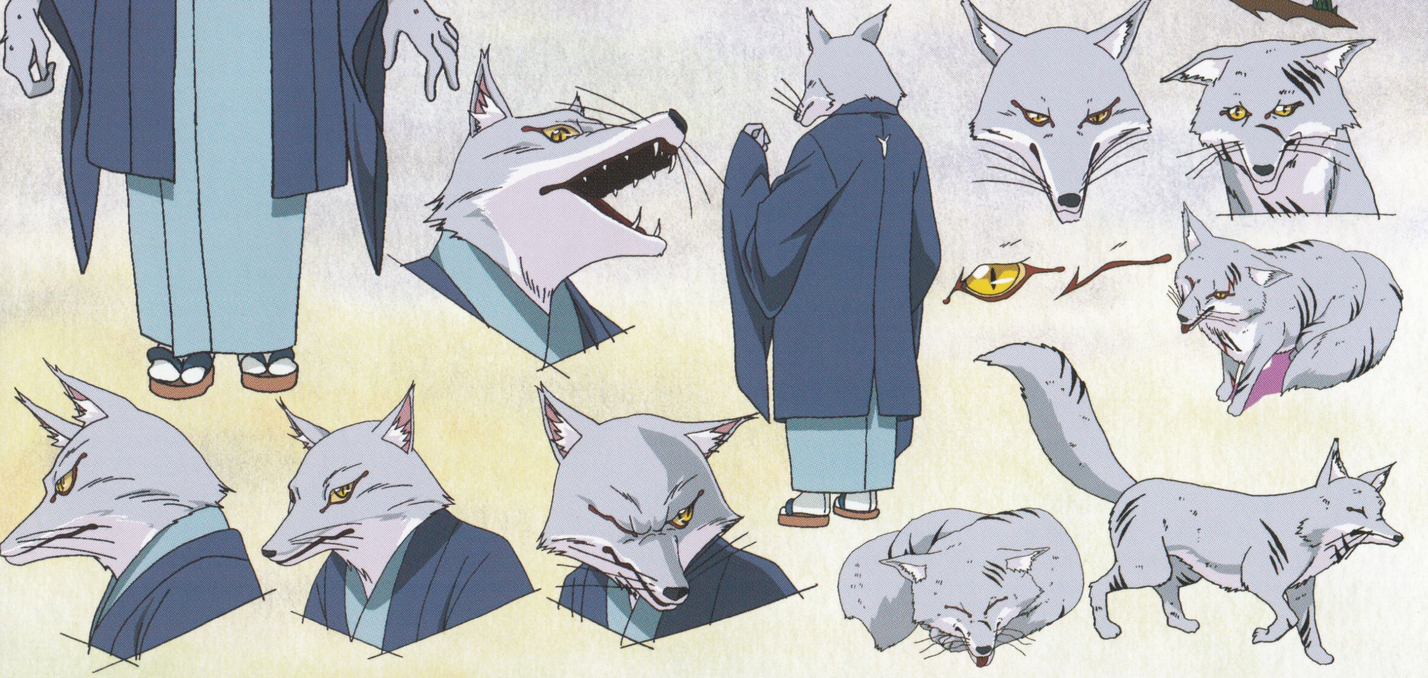


#33 白山坊



とある山々と、そこに住む狐を支配する巨大な妖狐。六代目の白山坊を襲名する際に先代と戦い、勝利するも深手を負う。それを助けたのが葛見の娘であるやよいで、以来ずっと彼女を見守り続けている。やよいの父とは「18になった娘を差し出す代わりに富を授ける」という契約を交わし、そして10年後、約束通り18になったやよいを迎えに来る。西洋妖怪ブエルの猛攻からやよいを守った末に結ばれた。

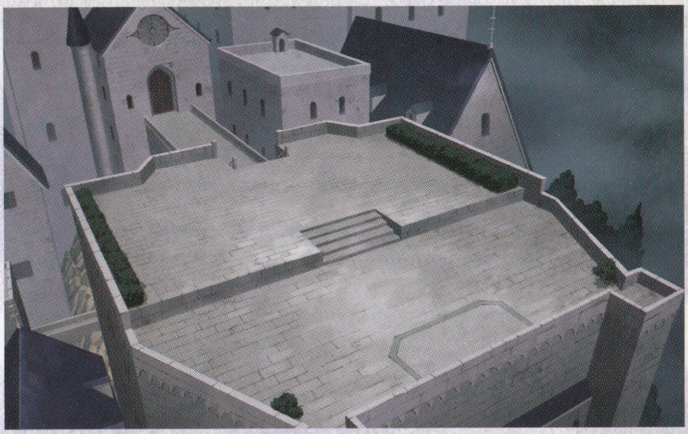




美術ボード

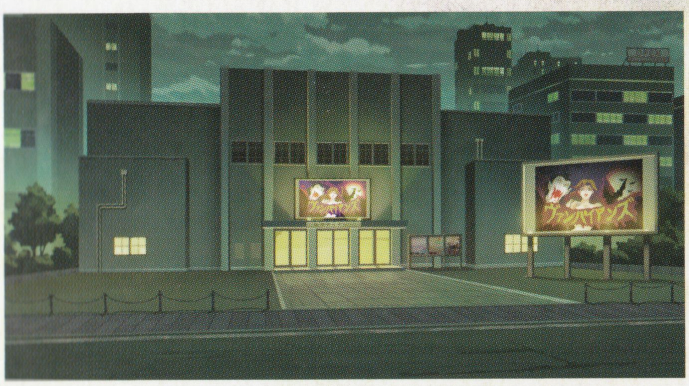














BIXA-9013／BIBA-9023

デザイン：バナナグローブスタジオ

